申候、

一御壺御着御試より十二三日目、但例年日積如此、御壺御用ニ付被登候御歩行頭衆、上京日限之義、毎年四月末五月上旬、宇治江直ニ着、御壺被ニ相渡一候、逗留中は伏見に居被申、御賄者出不申候、

一御詰日　御壺御着より九日目、但例年日積如此、

一御發駕　御詰日より凡七日目、但土用二日前江戸御着、

一總御壺其儘江戸江下り申候、愛宕江者上り不申候、

一御茶料者、御茶詰上候刻、御壺一つニ付、黄金一枚宛致ニ拜領一候、霜覆御茶摘賃、其外諸入用共、自分入用に仕立申候、御茶袋紙、門太郎又兵衛始、御物御茶師十一人共、年々致ニ拜領一候、尤美濃江被ニ仰付一、辻六郎左衛門より請取、右銘々江相渡候、此外御入用不被下候由、

〔類例略要集〕御茶壺御用宇治江御徒頭即日御暇

明暦二申年閏四月十八日　石川六左衛門

同三酉年四月十九日金一枚時服二　六ノ廿一歸御禮　朝倉仁左衛門○略中

御茶壺宇治御用即日御暇ニ無之分、但御徒頭、

寛文二寅年四月九日金一枚時服二　六ノ十九歸御禮　天野佐左衛門○略中

享保七寅年二月十一日　八ノ廿八歸御禮　小出助四郎

從此以後大御番衆より御差添ト成京上り大坂下り、扣は其組ニ而相定、○中略

右御暇之節、金三枚時服二の外羽折被下、

延寶九酉年二月六日　稲生七郎右衛門

甲州天目山谷村江御茶壺御用、

天目山江　寛文六午十ノ八即日賜ニ御朱印一　大森半七郎